

「今、イエスと出会う」

(ヨハネによる福音書 21:15-25)

今日の福音書は、他の福音書では弟子の召命のところにおかれている箇所です。しかし、ヨハネによる福音書はこの箇所をご復活の文脈においています。ヨハネによる福音書は、四福音書の中で最も後期に記されたもので、著者が属したであろうヨハネ教団は、主イエスに直接会うことがなかった世代の人々でした。しかし、ヨハネによる福音書は繰り返し「時空を超えて、あなたがたも、主イエスに会える」ということを伝えます。2,000年後のわたしたちも、主イエスに会うことができる、そんなことがどうして起こるのでしょうか。それが、今日の福音書に記されていることです。

漁は夜にします。しかし、何も獲れないまま夜が明けてしまいました。そこに、ある人が来て、網をおろしなさいと言いました。言うとおりにすると、大漁です。その人の言葉が大漁の恵みをもたらしました。漁を宣教活動と捉えるなら、ヨハネ教団の人々は宣教活動の中でこの恵みに与り、それを起こしたのが「主だ」と実感したのです。たとえば、わたしたちも教会の交わりにおいて、主イエスが導いてくださらなければ、出会うことがなかった人々と出会います。また、想像もつかない導きによって、教会を訪れる人を目の当たりにします。その時、わたしたちもこのコトを起こしてくださったのは「主だ」と実感します。ヨハネ教団の人々はこのような経験をわたしたちに伝え、今も「主だ」という実感の中で、わたしたちも主イエスに出会うことができると伝えます。

主イエスは、獲れた魚をさっそく焼いて、パンと共に弟子たちに与えました。もはや、弟子の誰一人、「あなたはどなたですか」と問う者はいませんでした。その言葉によって大漁に恵まれ、共に食事をするその交わりにおいて、主イエスが共におられることを実感したからです。これが、ヨハネ教団の人々の実感でした。わたしたちもまた、この交わりにおいて、主イエスと今、会うことができます。わたしたちは互いに無関心であったり、食事もできないような関係であってはならないのです。そうではなく、主の言葉に信頼し、一緒に食卓を囲む、まさに主の家族の交わりにおいてこそ、2,000年後を生きるわたしたちも、主イエスと共に生きることができるのです。主イエスは今も、み言葉によって導き、共に食事をする交わりへとすべての人を招いておられます。